

『浜松中納言物語』における感情のゆらぎについて (中)

著者	大原 理恵
雑誌名	東北大学附属図書館研究年報
号	31, 32
ページ	45-50
発行年	1999-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133262

『浜松中納言物語』における感情のゆらぎについて（中）

大 原 理 恵

二

しかし、拡散的・融合的でありかたがこの物語の全てであるわけではなく、そうした夢幻的情緒のみに彩られた作品と見なせない傾向もまた認められる。河陽県后に対する中納言の感情が拡散的であり現実離脱の傾向を帯びるものとすれば、大君に関しては、日常性を抜け出しきれていないだけに悲痛の色合いが今少し濃いように思われる。大君が出家の身となったことは、必ずしも別世界の住人になったことを意味しない。尼でありながら中納言から正妻格の扱いを受けているのも、彼女の人物の描写に超越性の強調が薄いこともあって、客観的には驚くべき事態であるにもかかわらず、作品中では安定した日常的世界を形成しているように見える。

巻二において、大君が尼となるにいたった事情を知らされた中納言は、京に戻るとひたすら大君（をはじめとする家族）との関係回復につとめ、やがて二人は穏やかな日々を迎えることになる。しかし、二人の間の精神的緊張は消えてはいない。巻三にはその緊張の高まりが描かれている。それは「まことや」と書き起こされる、大式女をめぐるやや俗な面を持つ事件とないまぜに書き進められているためか、家庭内の波風といったおもむきの日常性が加わり、さらに対照的に俗世間を離れた吉野山の物語が前後に配されている。中納言は、ことの次第を

その都度大君に物語り、そのたびごとに中納言の帰国を待たずに尼となつてしまつたことに對する恨みの言葉を繰り返している。

大武のむすめの事はかたりきこえたてまつりにしかばこよひのうたゝねに飽かざりつるほとゝぎすのこゑの事などのこる事なくかたりきこえ給てよのつねのありさまにて待ちうけ給はましかばありつかぬかやうのふるまひなどは思より侍らざらましと思侍りつるに (中略) とかこちて (二九六・七頁)

と語らひきこえたまへば (中略) これもたれゆへぞうちこそかう背きはてられたてまつりたれ人ぎゝにまた人をならべたてまつらじと思侍りしぞ (二九九頁)

女君も例のありつる事どもとの北の方の御事など語り給て (中略) うちこそ世づかぬ御ありさまなれど人ぎゝはすべてけざやかにかゝづらひたる事なくて止みなんとのみぞ思給に何事につけても神仏をかけつゝもわが御ゆくさきの心もしらずちかひちぎりきこえ給なをつきもせず隔てそめにしうらみをのみ聞えたまひてよろづの事のこりなふ語らひ聞え給を (三〇三頁)

(三一七頁)

大武女の物語は慌ただしく展開する。これは、大武女の母や衛門督の配慮に欠ける性格を反映するかのようである。一方で、大君には状況の変化はなく坦々とした日常が過ぎて行くが、それだけに思い澄ましたようでも抑えきれない、大君に對する中納言の心情の流露が際立っている。

大武女にひそかに逢つた中納言は、橘の香に時鳥の声ということさらのような後朝の別れをし、その余情さめやらぬうちに帰宅する。その時異常な感情の高ぶりを覚えた中納言は、つい大君への未練を口にする。

ほのゝくと明け行く空のけしき春秋のかすみきりよりもとらずあさみどりなるこずゑの何となくけぶり渡

りたるほどをながめて端近う柱に寄り居てをこなひ給に思もかけず艶なるねくたれの姿なまめかしうて御簾うちあげて簀子の長押にをしかゝりて居給ひぬればなをいとつゝましうて数珠などさらぬ顔にまぎらはしもてかくい給つゝはぢしらひ聞えたまひて例の薄鈍の御衣ども何となき御衣のすそまでも見所おほく著なされて何のつくろひなくうちとけ給へる御朝顔のけしやういみじくしたらん色あはひにていとけだかう清げにほひおほかる御ありさまめづらしうおかしと見給へる人の月かげよりもなをものごとにありがたうめでたう見え給をいみじう思とりすましたる心もなを胸つぶれて飽かざりつる別れはかたはらにさしをかれて涙ぞ落ちぬる

見るたびにまづも乱るゝ心哉はちすの上になぐさむれども

あはれと心ふかげにうちながめたまへる御ありさまはたゞいま極楽のむかへありて雲の上に乗るとも立ちかへりみすぐしがたき御けしきなり

うきながらとまる心もありなまし蓮のうへの露もかけずは

常はつきせず世を厭ひおぼしたるけしきのみなげのたはぶれ事にもかけ給をけさはあはれすてぬさまにいひなし給へるもいと心づくしなるにけうらなる若き尼二人清げにてかるらかにしやうぞきてあかたてまつりなどするも人に違ひさま異なる御いとなみにやと涙こぼれておぼゆるを罪の深きにや侍らむ常より物あはれに侍やけさは乱れ心ちもなやましう侍をわたらせ給ねとて例の御方に入り給へれば人々おどろきさはぐ。

（二九五・六頁）

この部分の描写は、その要素に分解するならば、『源氏物語』などの記述を型として継承しているといえよう。その型の一つは、この物語では大君の容姿にふれる度に繰り返し用いられている「尼姿の美」である。

殊更人にも見せまほしき様してぞおはする薄き鈍色の綾中には萱草など澄みたる色を着ていとさゝやかに様体をかしく今めきたるかたち髪は五重の扇を広げたるやうにこちたき末つきなりこまかにうつくしき面様の化粧をいみじくしたらむやうにあかく匂ひたり行ひなどをし給ふも (中略) 絵にも書かまほし (中略) うち見るごとに涙のとめ難き心地するを (中略) 我したらむあやまちのやうに惜しく悔しく悲しければつゝみもあへず物狂はしきまで (中略) 尼なりともかゝる様したらむ人はうたても思えじなど中々見所まさりて心苦しかるべきを

(源氏物語 手習 五—三九九・四〇〇頁)

今一つの型は「美しさの再確認」とでもいえようか。男君は他の女性に初めてまことの契りを結びその感激もさめやらぬうちに帰ってくる。しかしそれでも猶、見慣れた筈の女君の美しさに驚く、というものである。

ねくたれの御かたちいとめでたく見所ありて入り給へるに臥したるもうたてあればすこし起きあがりておはするにうち赤み給へる顔のにほひなど今朝しもいとをかしげさまさりて見え給へばあいなく涙ぐまれて暫しうちまもり聞え給ふをはづかしく思してうちうつし給へる髪のかゝり髪ざしなど猶いとありがたげなり

(源氏物語 宿木 五—五九頁)

二条院におはしましつきて女君のいと心憂かりし御物隠しもつらければ心安き方に大殿籠りぬるに寝られ給はずいと寂しきに物思ひ勝れば心よわく対に渡り給ひぬ何心もなくいと清げにておはす珍しきをかしと見給ひし人よりも又これは猶あり難き様はし給へりかしと見給ふ物からいとよく似たるを思ひ出で給ふも胸塞がればいたく物思したる様にて御帳に入りて大殿籠る女君もあて入り聞え給ひて心ちこそいと悪しけれいかならんとするにかと心細くなんあるまろはいみじくあはれと見置いたてまつるとも御有様はいとく変りなむかし

(源氏物語 浮舟 五—二七頁)

大君の正妻に準じた扱いは、こうした物語上のとりなしにも現れているのである。だが、本来ならば穏やかな日常に回帰する糸口となるべき男君の心情も、大君が尼であるために逆に二人を破滅に導くものともなりかねない。「罪の深きにや侍らむ常より物あはれに侍やけさは乱れ心ちもなやましう侍を」「かきみだりなやましくさへなりぬ」と中納言はしきりに心の乱れを訴えながら（これは、こうした場合の常套句でもあるようだが）、「御殿籠」る。ここで、直ちに作者は「かしこには」と大弐女の方に話を翻す。中納言の歌を「何となく心あくがれ乱れくらす」状態で受けとった大弐女の返歌を、中納言は大君に見せ、物語は中納言と大君の方にもどる。「これもたれゆへぞ」という中納言の言葉に、大君は顔を赤くし、その様子を見る中納言もまた平静ではいられない。そうした中納言の心の高まりをさえるかのように、再び大弐女の話が持ち出される。

たゞ御顔のみ赤くなりわたりてともかくも聞え給はぬ用意もてなし猶いとかばかりなるは此世にありがたうこそとうちまもり聞え給に御胸つぶ／＼と鳴る心ちせられ給それより後ひまいとありがたくておとも女もかたみに哀と心をはし聞え給ながら行きあふ事いとかたしわづかに夕暮のまぎれよひのほど／＼は夢の浮橋の心ちしてあはれにおぼし出でらる

（二九九・三〇〇頁）

大弐女と中納言の交渉もはや行き詰まった状態であるが、作者はあっさりと、大弐女に、通いはじめて間もない夫に華々しく迎えとられるという「幸」を与える。中納言も、大弐女が衛門督の妻となったほうが、世間的な意味では幸福であることを認めざるを得ない（「こよなきさいはいなりかし」）。これは主人公の敗北と考えるべき性質の書きなしでもないが、この「幸」に本人（大弐女）と周囲の人物との意識の深刻な乖離を讀者に認識させようという意図があるようにも思われぬ。中納言の反省にふれているのは、大弐女の心情にもかかわらず、やはり物語としては「幸」を得た大弐女を描こうとしているものと考えられるのである。この部分では悲哀の描写

はむしろ、衛門督の北の方に集中されているようである。品位はあるものの陰気といえるほどにおとなしい人柄の北の方の嘆きを耳にして、中納言は心の内で衛門督を非難し、大君についてあらためて「人ぎゝはすべてけざやかにかゝづらひたる事なくて止みなん」と決意する。大君は逆に「かくてのみは人のおはすべき事にもあらずさらぬさきにのどやかならんすまゐにかけ離れなんこそつゐの心安き事なれ」と考え、これをきっかけに中納言にほのめかすが、きき入れられない。

我が身はいかで人ぎゝもおこがましいみじう思すまうといふともかううらなきなからひはをのづから乱るゝ
ふしの出で来ぬさきになくなりてしがな

（三〇四頁）

このどうにもならない事態の解決としては、一日も早く仏に迎えとられる日をと願うしかない、というところまでつきつめられるが、それ以上は追求せず「とおぼさるゝにつけてもいとあはれなり」と作者は穏やかにおさめている。

さて、中納言の衛門督に対する批判は、皇女降嫁の話が持ち上がったことで直ちに我が身に降りかかってくる。中納言の動揺は激しいが、さしあたっては、巻三と四を緊張をもつて連結する以上の働きは見せていないように思われる。すでに、二人の意志は再確認したばかりであり、中納言の動揺は要するに如何に穩便に辞退するかを思いついておさまるほどのことであり、大君にいたっては、多少の体裁の問題にすぎないかのように描かれているからである。

（未完）